令和五年度　鹿児島純心女子短期大学　国語問題（一般選抜Ａ日程）　その一

【一】　次の文章は志賀直哉「焚火」の一節で、旅先で夫婦が焚き火を囲み宿屋の主人Ｋさんの話を聞く場面である。これをよく読み、後の設問に答えなさい。

去年、山にはもう雪が二三尺も積った頃、東京に居る姉さんの病気が悪いと云う知らせでＫさんは急に山を下って行った。

然し姉さんの病気は思った程ではなかった。三晩泊って帰って来たが、水沼に着いたのが三時頃で、山へは翌日登る心算だったが、僅三里を一ト晩泊って行く気もしなくなって、Ｋさんは予定を変えて、然し若し登れそうもなければ山の下まで行って泊めて貰うつもりで、水沼を出た。

そして丁度日暮に二の鳥居の近くまで来て了ったが、身体も気持も余りに平気だった。それに月もある。Ｋさんは登る事に決めた。然しそれから登るに従って、雪は段々深くなった。Ｋさんが山を下りた時とは倍位になっていた。それでも人通りのある所なら、深いなりに表面が固まるから、左程困難①はないが、全で人通りがないので軟かい雪に腰位まで入る。その上、一面の雪で何処が路かよく知れないから、幾ら子供から山に育って慣れ切ったＫさんでも、段々にまいって来た。

月明りに鳥居峠は直ぐ上に見えている。夏はこの辺はこんもりとした森だが、冬で葉がないから上が直ぐ近くに見えている。その上、雪も距離を近く見せた。今更引き返す気もしないので、蟻の這うように登って行くが、手の届きそうな距離が実にヨウイ（ア）でなかった。若し引き返すとしても、幸い通った跡を間違わず行ければまだいいとして、それを外れたら困難は同じ事だ。上を見ると、何しろ其処だ。

Ｋさんは、もう一ト息、もう一ト息と登った。別にキョウフ（イ）も不安も感じなかった。然し何だか気持が少しぼんやりして来た事は感じた。

「後で考えると、本統は危なかったんですよ。雪で死ぬ人は大概そうなってそのまま眠って了うんです。眠ったまま、死んで了うんです」

よくそれを知りながら、不思議にＫさんはその時少しもそう云う不安②に襲われなかった。そして、ともかく、気持を張った。何しろ身体がいい。それに雪には慣れていた。到頭それから二時間余りかかって、ヨウヤク（ウ）峠の上まで漕ぎつけた。

雪の深さは一層増さった。然しこれからは一寸、下りになる。下ればずっと平地だ。時計を見ると、もう一時過ぎていた。

遠くの方に提灯が二つ見えた。今時分、とＫさんは不思議に思った。然しとにかく一人きりの所に人と会うのは擦れ違いにしろ嬉しかった。Ｋさんは又元気を振い起して、下りて行った。そして、覚満淵の辺でそれらの人々と出会った。それはＵさんという、Ｋさんの義理の兄さんと、その頃Ｋさんの家に泊っていた氷切りの人夫三人とだった。「お帰りなさい。大変でしたろう？」とＵさんが云った。

Ｋさんは「今時分何処へ行くんですか？」と訊いた。

「今、お母さんに起されて迎いに来たんですよ」とＵさんは何の不思議もなさそうに答えた。Ｋさんは慄③っとした。

「私がその日帰る事は知らしても何にもなかったんです。後で聴くと、お母さんがみいちゃん（Ｋさんの上の子供）を抱いて寝ていると、――別に眠っていたようでもないんですが、フイ（エ）にＵさんを起して、Ｋが帰って来たから迎いに行って下さいと云ったんだそうです。Ｋが呼んでいるからって云うんだそうです。あんまり明瞭しているんで、Ｕさんも不思議とも思わず、人夫を起して支度させて出て来たと云うんですが、よく聴いて見ると、それが丁度私が一番弱って、気持が少しぼんやりして来た時なんです。山では早く寝ますからね、七時か八時に寝て、丁度皆ぐっすりと寝込んだ時なんです。それを四人も起して、出して寄越すんですから、お母さんのは余程明瞭聴いたに違いないのです」

令和五年度　鹿児島純心女子短期大学　国語問題（一般選抜A日程）　その二

「Kさんは呼んだの？」と妻が訊いた。
「いいえ。峠の向うじゃあ、幾ら呼んだって聴えませんもの」
「そうね」と妻は云った。④妻は涙ぐんでいた。
「そんな気がした位では却々（なかなか）、夜中に皆を起して、腰の上まで埋（う）まる雪の中を出してやれるものではないんです。それは巻脚絆（まききゃはん）の巻き方が一つ悪くても、一度解けたら、凍って棒になって了いますから、とても、もう巻けないんです。だから支度が随分ヤッカイ（オ）なんです。支度にどうしても二十分やそこらかかるんですよ。その間お母さんは、ちっとも疑わずにおむすびを作ったり、火を焚きつけたりしていたんです」
Kさんとお母（つか）さんの関係を知っているとこの話は一層感じが深かった。

（志賀直哉「焚火」『小僧の神様・城の崎にて』新潮文庫、昭和六〇年　なお適宜ルビを補った）

問一　傍線部ア～オのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線①「困難」と同じ熟語の構成をしているものを以下のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　除湿　　イ　功罪　　ウ　救援　　エ　硬貨　　オ　不審

問三　傍線部②「そう云う不安」とあるが、不安の内容を次のようにまとめた。空欄A～Cにあてはまる言葉を文中からそのまま抜き出しなさい。

雪で死ぬ人の多くが気持ちが［A］となり［B］しまい、そのまま［C］しまうという不安。

問四　傍線部③について、この時Kさんはなぜ「慄っとした」のか、その理由を五〇字以内で答えなさい。（句読点などの記号や空白も字数に含む）

問五　傍線部④について、妻が「涙ぐんでいた」理由を本文を踏まえて八〇字以内で説明しなさい。（句読点などの記号や空白も字数に含む）

問六　①作者である志賀直哉の代表的小説を以下のア～エの中から一つ選びなさい。

ア　或る女　　イ　地獄変　　ウ　友情　　エ　暗夜行路

②また、志賀直哉が属する文学史上の流派を以下のア～エの中から一つ選びなさい。

令和五年度　鹿児島純心女子短期大学　国語問題（一般選抜A日程）　その三

ア　新思潮派　　イ　白樺派　　ウ　耽美派　　エ　新感覚派

【二】次の文章をよく読み、後の設問に答えなさい。

我が国においては個人は長い間西欧的な個人である前に自分が属する人間関係である「世間」の一員であった。A 何らかの会合において発言する際には個人としての自分の意見を述べる前にまず自分が属する「世間」の利害に反しないことを確認しなければならない。まず「世間」人として発言しなければならなかったのである。自分自身の意見は本音として「世間」の蔭に隠れていた。「世間」を代弁する発言はこうして個人にとっては建前となり、本音と区別されたのである。こうして「世間」と個人の関係の中で我が国における建前と本音の区別が生まれたのである。

このような建前と本音の違いがくっきりとした輪郭(ア)をもって現れたのが明治以降の我が国のあり方、特に近代化、西欧化との関係の中においてであった。明治政府は欧米の近代化路線を採用することを決めた。B その際に真の意味で我が国を欧米化することが考えられたわけではなく、少なくとも社会構造や政府機関の組織、軍制や教育などの面での近代化が考えられていただけである。制度やインフラストラクチャーの面での近代化にすぎず、西欧精神の面にまで視線が届いていたわけではなかった。C 表面の近代化に過ぎず、精神の面では旧来の路線の上ですべてが考えられていたのである。

このような状況の中で我が国特有の状況が増幅(イ)されたのである。欧米は圧倒的な文明の力をもって我が国に圧力をかけてきた。それは単に軍事力や合理的な法体制だけでなく、フランス革命を経て身につけた人権理念を表面に掲げたものであったから、抵抗のしようがなかった。明治時代に欧米を訪れた政府の要人たちは欧米の社会の基礎をなしている理念の圧倒的な力に感嘆を惜しまなかった。武力だけの圧力なら抵抗のしようもあったであろうが、否定し去ることのできない崇高(ウ)な理念①が掲げられたとき、その前にひれ伏すしかなかったのである。D 我が国の現実は欧米とはあまりにかけ離れていた。明治時代に我が国は国を挙げて欧化政策に取りかかるしかなかったのである。しかし欧化といってもそれは法制や行政構造、産業、教育制度などに限定され、人と人の関係のあり方にまではとうてい及ぶものではなかった。欧米諸国は近代化以前に数千年の時間をかけてその準備をしてきたのであり、我が国が欧米化路線を採用したとしてもわずかの時間にそのすべてをたどることができるはずもなかった。また当時の政府の要人たちも精神の面まで欧化しようと考えていたわけではなく、いわば和魂洋才(エ)の道を模索していたのである。

文明にせよ、文化にせよ、最終的にはその根幹(オ)に F の特異なあり方がある。新しい人と人の関係のあり方が生み出されたとき、新たな文明が誕生する条件が生まれたことになる。明治時代に我が国は欧米の諸制度を取り入れながら、結果としては人と人の人間関係については従来の形を残すことになった。そのような決断を明治政府がしたわけではない。圧倒的な欧米の近代的諸制度を前にして身も魂も奪われてしまいかねない状況の中でかろうじて踏みとどまったというべきであろう。こうして我が国特有②の状況が生まれた。国家の体制と法制、経済の諸制度、教育体制などは欧米に範を得て一応近代化されながら、一人一人の人間の生き方の点では従来の慣行が維持されたのである。

この状況はしかしやや複雑であった。E 当時欧米を訪れた人々は欧米の近代的個人のあり方に感嘆し、我が国の個人のあり方に不満を漏らしていたからである。欧米の個人のあり方を理想とする人々も少なからずいたので

令和五年度　鹿児島純心女子短期大学　国語問題（一般選抜Ａ日程）　その四

ある。しかし我が国は結果としては従来の個人のあり方を変えることはなかった。こうして近代的な枠組みの中に③従来の個人のあり方だけが生き残ることになった。

（阿部謹也『「教養」とは何か』講談社現代新書、一九九七年）

問一　傍線部ア～オの漢字の読みをひらがなで答えなさい。

問二　空欄 A ・ B ・ C ・ D ・ E に入る最も適切な語句を、次のア～オの中から選びそれぞれ答えよ。

ア　しかし　　イ　なぜなら　　ウ　したがって　　エ　しかも　　オ　つまり

問三　傍線①「理念」について、本文中で同じ意味で用いられている言葉を次ア～エの中から一つ選びなさい。

ア　近代　　イ　精神　　ウ　制度　　エ　世間

問四　空欄 F に入る適切な言葉を、本文中から六字で抜き出しなさい。

問五　傍線②「我が国特有の状況」について、本文の言葉を用い七〇字以内で説明しなさい。（句読点などの記号や空白も字数に含む）

問六　傍線部③「従来の個人のあり方」において生まれた態度を筆者は何としているか。本文中から八字で抜き出しなさい。